

人権ゆかりの地探訪

7月29日(木)

大江磯吉は、島崎藤村の小説『破戒』の主人公「瀬川丑松」のモデルになったといわれる旧制柏原中学校(現柏原高等学校)の第2代校長です。

磯吉は、1868(慶応4)年、長野県下伊那郡(現飯田市)の被差別部落に生まれました。大江家は新年の門付け芸の春駒(旅芸能)やせんべいの行商などを生業としていたため、差別と極貧の少年期を送りました。

磯吉は「差別を乗り越えて生きるには学問こそ大切だ」という父の励ましに自らの向学心を重ね、幼い頃から勉学に励み成績も優秀でした。

1886(明治19)年、諏訪郡(現岡谷市)の小学校に教諭として赴任します。当時は正教員の資格をもった教員は少なく、地域の人たちは磯吉の着任を歓迎しました。

しかし、その生まれが職員の間で問題となり、ついには排斥の動きが表面化します。磯吉は、着任後わずか7日間で辞職を余儀なくされます。

1891(明治24)年には、県尋常師範学校(小学校教員となるべき者を養成する所として設けられた学校)に新任の教師として赴任しますが、ここでも厳しい差別にあいます。磯吉は夏期講習会の講師に招かれましたが、宿泊した飯山町(現飯山市)の光蓮寺では、被差別階層出身ということで宿泊をいきなり断われ、畳替えをして塩をまかれたと言われています。

1895(明治28)年3月、大阪へ赴任した磯吉は、ここでも生まれを暴かれ、排斥運動を受けることとなります。排斥運動は、磯吉の母(志の)が磯吉を学校に訪ねたときに居合わせた教員と生徒が、わざわざ磯吉の故郷である信州へ調査に行ったことに始まると言われています。

同年4月、大阪を排斥された磯吉は、鳥取県

テーマ

大江磯吉と柏原高校



尋常師範学校に長野県出身の小早川潔校長によって迎え入れられます。ところが、熱烈な国家主義者である安達常正校長が着任し、強引な手法で改革に着手し、ついには磯吉と彼に共鳴する4人に休職命令を発しました。生まれを理由に何度も排斥を経験した磯吉でしたが、鳥取に限っては、教育信念を貫徹するために教壇を去る結果となったのです。

1901(明治34)年3月27日、磯吉は兵庫県知事服部一三に招かれ、兵庫県下で4番目に創立された中学校である氷上郡の柏原中学校(現柏原高等学校)第2代校長に就任します。

磯吉は、生徒を中心に据えたアカデミックな学校を目指しました。新教育課程を定め、どんな上級学校への進学も可能なカリキュラムにしました。「郡立」だった学校を「県立」にし、授業料を5円50銭から2円30銭へ、翌年は1円まで値下げしました。創立当初は中途退学者が多く、「これでは貧しいものは学問で身を立てることはできないではないか」と考えたからでした。

学友会(生徒会)を創設し、生徒の自主的な自治会やクラブ活動も容認しました。

「島国の日本が世界に通用するためには船を使った交易や海軍が必要だ」と考えポート部もつくりました。演説部では有田、細田、芦

講師

荒木

謙さん(元柏原高校教員)

参加者

30人

見学地

柏原高校くすの木他

田の「三田ガラス」と呼ばれる生徒が活躍し、その三人ともが後に日本の政治界、経済界をリードしていくことになりました。

また、日常的に行われていた鉄拳制裁を、大江は厳しく戒め、暴力をふるった上級生を下級生に謝罪させました。これに反発した第一回卒業生は学校への抗議文を廊下に掲載し、自分たちだけで記念撮影をすると、さっさと校門を出て行ったそうです。大江は彼らを罰することなく「ひとたび、卒業証書を渡したら彼らは社会人だ」とその行為を許しました。卒業記念品もなく去っていった卒業生を不憫に思った担任は、5年木のくすの木を現在の場所に植樹したのでした。

画期的な改革を次々と行った磯吉でしたが、「急性盲腸炎」「腹膜炎」を併発します。

同じころ、「腸チフス」で危篤状態にあった継母のもとに駆けつけ、自らも腸チフスに感染し、継母よりも先に他界します。

講演の最後に荒木さんが、私たちに投げかけられた質問です。「社会的な地位を得ていた磯吉でしたが、立派な洋服を村境で脱ぎ、粗末な被差別部落民の姿に着替えて帰郷していました。これはどうしてだと思いますか？」みなさんもぜひ考えてみてください。



人権コラム

母の「がんばれ」のエールに応えるため

母が平成30年7月30日午前5時13分、敗血症で86年の生涯を閉じました。7月27日までは普段通りに生活をしており、その日の午後、デイサービスより「お母さんが、38度の熱があるので病院に連れて行ってあげてください」との連絡がありました。かかりつけ医に診察をしていただきましたが「風邪だと思います」と言われ、お薬をもらってその日は帰りました。28日には熱も下がり安心しましたが、食欲がないのが気になって、夕方、救急病院を受診し点滴を打ってもらいました。29日の朝、食欲は戻りませんでした。冷やしたスイカを少し、おいしそうに食べてくれました。思えば、これが最後に食したのになりました。その日の昼に様子を見に行ったら、すでに苦しそうにしていたのですぐに病院に運びましたが「今日一日、もたないかもしれません」といきなり先生に言われました。この時は絶対助かると信じていました。私の願い通り、夜には血圧も安定し少し話もしてくれました。私たちと目を合わせ笑顔を見せてくれました。「家に帰りたい」と何度も言います。先生も安心され、私たちに「ご家族の方は帰っていただいても結構ですが、携帯電話には気をつけておいてください」と言われました。不安なまま帰宅し家で休んでいると、30日の

早朝、「血圧が下がってきて、危険な状態です。すぐに来てあげてください」と病院から連絡があり、駆けつけると血圧も70にまで下がっています。息も早くなっていました。「大丈夫がんばれ!」と何度も声をかけると、少し鎮めてくれましたが、そのうち安らかな息になり、午前5時13分、静かに息をひきとりました。

葬儀を担当していただいた方から、「どんなお母さんでしたか」と聞かれ「強い母でした」と答えました。本当に辛抱強い母でした。早くに夫を亡くし、3人の子どもを必死に育て、誠実に生きてきました。9年前には心臓を悪くし、心臓の弁を取り換える大手術にも耐えてくれました。胃に多数のポリープが見つかった時も、内視鏡で処置をもらっています。痛いとか辛いとか苦しいとかを言ったことがない母でした。

小学校の2年生の時だったと思いますが、絵を描く時に使う水入れを忘れて、「すぐに持ってきて!」と母に電話をしたことがありました。当時はプラスチックの水入れではなく、缶詰の缶を洗って3つを針金でつないで作っていました。探しても見つからず、慌てた母は、缶詰の缶を洗って自分で作って持ってきてくれたのだと思います。缶

の周りには、うっすらと血がついていました。「痛かっただろうな」と思いましたが、素直になれず謝ることもありませんでした。家に帰って、母の手を恐る恐る見てみると、絆創膏がいっぱい貼ってありました。

四十九日が過ぎ、遺品の整理をしていた時です。偶然、母のズボンのポケットに紙切れが入っているのを見つけました。なぜ、そのズボンのポケットに手を入れたのか不思議でしたが、その紙切れには、「がんばれ」とたどたどしい字で書いてありました。自分自身を奮い立たせるために書いたものなのか、家族や知人に向けて頑張ってもらいたいと思って書いたのかは分かりません。その「がんばれ」の文字を呆然と見つめながら、ただただ涙が止まりませんでした。辛いことがあったときに、それを見つめて頑張っていたのでしょうか。それとも家族に向けて「何もしてあげられなくてごめん。がんばってよ!」と思っていたのでしょうか。

母が亡くなって、早3年が経ちました。まだまだ寂しさはありますが、母の子に生まれたことを誇りに思い、母の「がんばれ」のエールに応えるため、これからも自分の人生を精一杯歩んでいこうと思います。

春日町 足立儀明

長年の知識と確かな技術と自由な発想—新しい業務スタイルを提案します。

防犯カメラ
防犯設計から施工まで徹底サポート!安心と安全のために

オフィス全体のセキュリティ対策
○情報漏えい ○不正アクセス ○なりすまし ○迷惑メールブロック等
○データ改ざん等ブロック
UTM(総合脅威管理ソリューション)
Unified Threat Management

株式会社 ユニットシステム
UnitSystem Corporation
https://www.unitssystem.jp
E-mail: info@unitssystem.jp

日本の旅 / 世界の旅 予約受付中
あなたの旅を応援します!

相談 相談 承り中 GoToトラベル

○お申込み・お問い合わせ
関西旅行社 丹波市柏原町柏原(JR柏原駅構内)
TEL (0795) 72-0325 FAX (0795) 72-2416
E-mail: info@kansairyoko.co.jp

編集後記
夏が終わり、過ごしやすくなってきたかと思えば、急な寒波の到来でストーブが恋しくなる。遅くまで明かった空は早々に暗くなり、季節の移ろいを感じます。
9月26日(日)に柏原高校で開催予定だった第68回兵庫県人権教育研究大会中央大会兼丹波地区大会は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止いたしました。細心の注意を払いながら準備を進めてきただけに残念でありませんが、今後も感染状況を注視しながら研修会や部会の運営に当たっていきたく思います。よろしくお祈りいたします。

